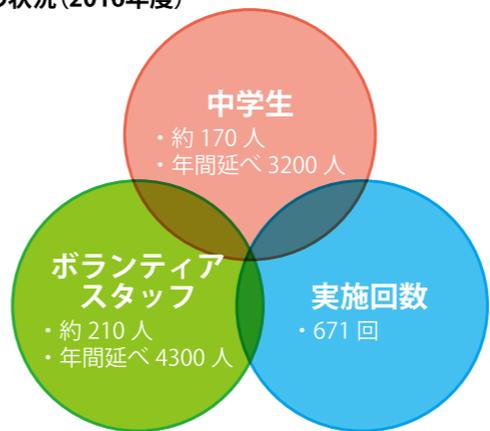


#### 学習支援事業とは

京都市ユースサービス協会では、様々な事情で学習環境の整いにくい状態にある中学生らを対象として、高校への進学を手助けする学習支援事業を2010年から行っています。2006年より

ケースワーカーの自主的な活動として始まった取り組みが事業化され、2017年には市内すべての区で学習支援事業を展開し、それぞれの地域の状況に合わせて運営を工夫しながら実施しています。

#### 運営の状況(2016年度)



#### 活動の実際

学習会は、週に1回、1時間半〜2時間半、1対1での学習支援をベースに、大学生を中心とするボランティアスタッフが中学生の希望や思いを聞き取りながら一緒に勉強しています。勉強以外にも、交流イベントで中学生同士やボランティアスタッフとの仲を深める機会もつくっています。

#### みえてきた成果

学習面での成果としては、継続的に参加をして

られる経験が中学生にとって大きな意味をもつのです。

同時に、ボランティアスタッフにとっても社会課題を身近に捉え、同じ学習会の仲間と共に考え、「他者の役に立つ」という経験は大きな意味をもちます。中学生にとっては身近な「大人」であるボランティアスタッフもまた、成長過程にいる青少年です。活動を通して他者と関わる機会を得ることは、彼らにとっても社会とつながり、成長する重要な機会となっています。

#### 花園大学研究チームから

こうした成果については、花園大学子どもの貧困研究会による「京都市学習支援事業調査報告」でも明らかにされています。この調査は、京都市ユースサービス協会が実施する学習支援事業の参加者・ボランティアスタッフ・ケースワーカーに対してアンケートを実施し、その結果をまとめたものです。調査報告の中では、中学生が安心できる相手と話すことで学習会を安心できる居場所と感じ、そういった居場所こそ自己肯定感が高まり、学習支援の成果を生み出していくことが報告されています。ただ勉強を教えるだけでなく、身近な大人と関わり、自分を肯定的に捉える経験をする事で学習支援の成果が生まれると裏付けされています。

#### 今後の展開

学習会に参加している中学生は経済的な困難の問題に限らず、親が遅くまで働いていて家での学習習慣が整っていない、外国にルーツがあり学習言語に困り感があるなど、異なる

#### 意欲をとりもどした中学生

勉強への苦手意識が強かった中学生のBさんは、問題に向き合うことが難しく「わからへんし嫌、やりたくない」と諦めの言葉をよく口にしていました。学校や家庭では、そのような態度について叱責されることが多く、一層意欲をなくしている状態でした。学習会ではBさんに寄り添うことを決め、決して叱ることなく「一人では難しいね、一緒にやってみよう」と声をかけ、「やればできる」経験を重ね、Bさん自身が「やってみよう」と思えるように働きかけを続けました。学習会で成功体験を重ねるうちに、次第にBさんは意欲的に学習に取り組めるようになりました。



スタッフ研修の様子

いる中学生の基礎的な学力の向上がみられました。学力に「遅れ」のある中学生もいましたが、1対1の体制をとってボランティアスタッフが継続的に関わることで

現在、市内全ての区に1つは拠点があり、数としては拡大・充実がはかられています。今後は、これまでの運営の中で見えてきた諸課題に向き合い、中身を充実させていくことが求められます。欠席の多い中学生や外へ出にくい中学生への対応や、高校進学後のフォローアップも検討が必要かもしれません。または、学習支援以外にも生活環境や家庭環境を包括的に支援する仕組みづくりが求められているかもしれません。全拠点で話し合い知恵を出し合いながら、中学生のことを大切に思う大人のネットワークを広げコミュニケーションの持つ力が発揮される場づくりができればと思います。

個々の状況を把握することができ、それぞれに必要な学習を組み立てることができました。

はじめは学習に取り組むことが難しかった中学生も、「わかる」という感覚が自信になり、学習への意欲向上につながりました。テストの点数や通知表の評定など、目に見える成果を見せてくれた中学生もいれば、意欲や集中力や態度など、その姿勢に成果を表した中学生もいました。

一定の関係性を築いたボランティアスタッフと学習を行うからこそ、細やかな気づきが活かせるのだと実感しています。

また、中学生とボランティアスタッフが良好な関係を築くことで、中学生にとって学習会が「飾らずにいられる場所」「安心していられる場所」になっています。信頼できるボランティアスタッフに見守られる安心感や、保護者や先生とは違った身近な大人に褒め